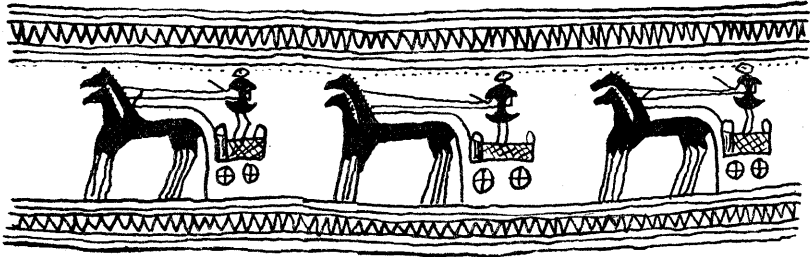


フレーベル以後の幼稚園



— < 8 > —

津 守 真

フレーベル主義の批判者たち

「フレーベルの抱いていた創造的自発性の原理は、まだ十分に実を結んでいるとは云えない。それはまだ完結してはいない。すべての改革は、もともとあるものに新たな生命を吹きこむ努力にすぎない。したがって改革の運動は一たび成功したと見えるときには、再び新たな改革を必要とするのである。」(註一) これはルイスヴィルの片田舎の一幼稚園教師アンナ・ブライアンが、一八九〇年の全国教育連盟の大会の席上で行なった講演の冒頭である。教育改革者としてのフレーベルのすぐれた洞察、児童に還れという主張も、一たびフレーベル運動が進展すると、その途上で形式化し、固定化して、再びもとの生命をふきかえすための改革が必要なことを説いたのである。ブライアン女史の「文字は人を殺す」という歴史的な演説は、主として恩物の使用に関する批判であった。以下に少しくブライアン女史の言葉を引用してその要点を述べてみよう。

(一) 恩物の体系は極めて整然と仕組まれているのでその通りに行なわねばならないように誤解され易いこと。「フレーベルが体系づけた恩物の系列は余りに完全に論理的に仕組まれているので恩物の材料や用具を、予め定められた手続きに従って公式通りに与え、教えなければならぬように誤解されるといふ危険がある。むしろそれは臨機応変に、保育者が智慧を働かしながら用いなければならぬものである。」

(二) 恩物があたかも唯一の教育手段であるかの如く考える傾向は誤まっている。もっと重要なのは洞察力のある。創造的な教師である。キングダーガルトナーたちは、フレーベルの精神と文字とを取り違えている。「幼児教育者は明晰な心、調和ある、健全な、力強い性格を必要とする。そしてフレーベルの材料に文字通りに盲目的に従従することを避け、恩物のあの沈滞した公式的な解釈から逃れ、自由な創造的な心をもってたえず根本的な精神を反省し、子どもの直接的な内的な状態と要求を見失わないようにせねばならぬ。そして手段としての材料に魅せられる余り、子どもを研究するよりも材料を研究するというようなことのないようにせねばならぬ。フレーベルのよき弟子となるためには、このような注意が常に必要である。」「子どもに単に一連の材料——恩物を与えることによって宇宙の真理の理解に導びくような方向を与えるのではなく、創造的な思考に導びくことができる。考えるのは、フレーベル主義者たちの根本的な誤りである。これは機械的な空虚なやり方である。それこそまさに精神を失った文字である。恩物は子どもに仕えるものではなくて、子どもを支配するものになってしまった。材料そのものが、何か魔術をさえ持っているかのようには考えられてきている。しかし、それはその背後に魂を持った教師がなければ、生命なき力なきものにすぎない。……文字は人を殺す。」

(三) 恩物の象徴主義は、恩物自身の致命的な欠陥である。

「幼稚園の材料の象徴的な使用は、しばしば全く根拠のないものである。それは将棋の駒のように勝手に動かすこともできるし、偶然的な結合をするものである。故に象徴主義は、たまたま真実をうつし、精神的な成長に役立つこともあるが、一度び誤まって用いられるときには、虚偽と物質主義に導びくのである。例えば、積木が単に一つの箱である以上の何か抽象化した意味をもたせる必要がどこにあるのだろうか。子どもはフレーベルを研究するためにあるのではない。子ども自身のの中の神性を発展させることを考えることこそ必要なのである。」

(四) したがってフレーベルの恩物は害こそあれ、益のないものである。恩物を全く離れて教育材料を考えることこそ必要である。というのがブライアン女史の結論である。「幼稚園の教師たちがフレーベルの材料——恩物——から離れ、子どもの発達のために必要とあれば手もとにある何でもを用いることができるようにならなければ、我々は教師としての全面的な責任を果しているということはできないだろう。奴隷のように、あるきままった形にすがりついている状態から脱せねばならない。この恩物がなくても、教師たちが子どもの思考を発達させ、感情を喚起し、創造的な力をよびおすことができるようになるまでは、彼らはこれを適当に使ひこなすだけの力をもたないのである。」

ブライアン女史のこの恩物批判は、これから四半世紀後

に、キルバトリックが系統たった恩物批判を行なう先駆とも云える。恩物が何の疑もなく受け入れられ、恩物がなくては幼稚園が成立しない程に思われていた当時においては、ブライアン女史の此の演説が多くの反撃にあったことは想像に難くない。多くのキンダーガルトナーたちの反対を受けながら、恩物批判の波は幼稚園界の一角を少しづつ崩していった。一八九五年の全国教育連盟幼稚園部の開会演説で、会長ルーシー・ウィーロック女史は、幼稚園改革の必要についてはっきりとした態度を示している。その要点を次に引用してみよう。(註二)

(一) 児童研究については、「我々は材料について極めて多くのことを研究してきた。我々は恩物について多くのことを語ってきた。しかし、幼稚園教師の最大の主要な仕事は、子ども自身を研究することである。」

(二) 恩物については「もしも我々がフレール自身にもどって見るならば、果して恩物が正しく用いられているかどうかは疑がわしいであろう。」とむしろフレールそのものの研究の必要を述べている。同じ態度はその象徴主義についても述べられる。「第一恩物の球が宇宙の統一を象徴している」と云っても、子どもがそれで遊ぶだけで落着きのない状態から調和と平和に導びかれるなどは、どんな幼稚園教師も信じていないだろう……。キンダーガルトナーとして我々もはつとフレール自身を研究せねばならないのである。」

(三) 幼稚園の実際について、形式化した運営から脱する必要をのべて、次のように云っている。「子どもが幼稚園の計画の中心であるべきである。材料などは、我々の扱かっている子どもと関聯をもって始めて価値がある。子どもから離れてこしらえたプログラムは全く無益である。」そして更に実生活における子どもを理解することの必要を述べて、「もしも幼稚園運動が十分に意義を保とうとするならば、幼稚園は人々の生活、家庭における父や母、子どもの生活に触れなければならぬ。我々は子どもを通して人々と接触し、又あらゆる社会の仕事と密に接触しているのである。」と強調している。近代的な幼稚園の身を見ることができよう。

こうした幼稚園自身の中に必然的に醸成されてきた幼稚園に対する批判とともに、その頃から漸く勃興してきた児童研究の先駆者たちの眼が幼稚園に対して向けられてきた。そして当時のどの幼稚園にも浸透していたフレール及びその追随者たちの理論と実際とに強い関心が向けられた。まだ緒についたばかりの児童研究は、大きな力とはなっていないが、児童に関心をよせる心理学者、教育学者たちはしばしば寄り集まって盛な議論を交していた。中でもシカゴのヘルバルチアン・ソサイアティは最も重要なグループであった。これは後に児童研究連盟となるのであるが、児童研究の先駆者として知られている、スタンレー・ホール、ジョン・デューイー、フランシス・パーカーなどによって構成され、しばしばシンポジ

ウムが行われて児童問題について議論が闊かわされていた。

一八九五年の夏、スタンレー・ホールは幼稚園の問題を討議し検討するために、幼稚園教育の指導者たちを招いた。最初集まったのは三十五人であった。彼は児童の成長の原理を語り、教育の実践面について改革を行なう必要があることを述べ、現在の教育が幼児の成長を阻害している点のあることを指摘した。続いて彼は、ついその頃に発行された、スザン・ブロー女史の書物「象徴的教育」を鋭く攻撃した。それはフレーベルの恩物論、象徴原理にもとづいた書物であり、スタンレー・ホールにとっては、生物学と心理学の科学的な成果を無視した書物だったのである。「そこで参会者たちは、二人、三人づつ会場をぬけていった。そして最後にただ二人、ブライアン女史とバティ・ヒル女史だけが残って講演を聴いていた。それは劇的な事件であった。」(註三) この後者は、後に進歩主義教育の第一の指導者となったのである。この逸話からも、当時の幼稚園において、いかにフレーベル主義が、またブロー女史の幼稚園主義が強くキングダーガルトナーたちの間に浸透し、彼らの信念となっていたかが分るであろう。その幼稚園主義を侵すものを、彼らは受けいれることができなかつたのであった。

児童研究者たちは幼稚園の中の進歩的な考えをもつ人々に協力して、一方には従来の幼稚園を厳しく批判し、他方進歩主義教育の実践を推進した。ここで児童研究者の幼稚園批判

がどのようなものであったかを見るために、スタンレー・ホールを引用して要約してみよう。(註四)彼の批判は極めて皮肉にみち、痛烈で面白い。

(一) フレーベルの概念は曖昧で多義的である。「フレーベルはもともと幻想家であり、神秘主義者であり、魂の奥まで見通す大きな眼で半分分つたような、半分分らぬような巨大な概念と相撲をとっているのである。それは彼のあの難解な、独得の表現法にあらわれる。彼の文章はもつと反復を省いて、曖昧なものをもっともらしく表現することをやめて、すっかり書き改めなければならない。ドイツにおいてその当時栄えた。非実地的な哲学によって養なわれた彼の考え方と、彼の結晶学に関する興味及び彼の貧弱な数学力とが、あの難解な表現に影響を及ぼしているであろう。」

(二) 恩物の誤まりについては、先ず第一に恩物と同じ位に役立つ効のある教育材料が恩物以外に無数にあることが気がつかねばならない。「恩物を考案するに当って、フレーベルは大きな才能を発揮した。しかしそれが一度び彼の手を離れるや、それは彼の教育理念の極めて不完全な表現、手段にすぎないことを曝露したのであった。……彼は恩物をもって、子ども遊びの完全な系列、仕事の初歩階梯と考えたが、この点で彼は根本的に誤まりを犯したのである。……あらゆるものの中に、すべてを見出そうとするあの象徴主義に従えば、手もとにあるどんなものをとり上げても、それに高尚な

解釈をこじつけることができるはずである。」

更に恩物は発達の観点からみて、子どもの特性に適合していない。例えば「幼児期には子どもの興味は生きているものに注がれるのに、恩物は生きていない物を、しかも余りに数学的な概念に従って扱かうのである。」こうして恩物は発達の観点からみて、全く子どもの重荷になっている。「恩物は子どもを過労にしている。それは学校という小さな工場にむりやりに子どもを押しこめ、座ってやる仕事にしばらくつけて、もっとずっと後になって発達するような小さな筋肉を使う活動を余りに強調している。」

(三) 幼稚園教師、キンダーガルトナーたちの自己崇拜的傾向の結果、幼稚園は他の教育体系から切り離されたものであるかのように思い、セクシヨナリズムを形成し、幼稚園指導者たちの折威的な態度をつくっている。「幼稚園はそれ自身一つの教育的宗派のようなものである。彼らは幼稚園の原理を説いて、教育の原理を説かない。……思慮と強力な人格をもつて、アメリカの全幼稚園界を支配している極めて有能な婦人がローマ法王のように君臨して、すべての異端者を威嚇し、その側近の弟子たちは、裁判官のように、時には社会的排斥という手段を用いて、自由な広い空気を呼吸しようとする人々を圧迫するのである。」これは実に皮肉な非難であって、当時の幼稚園の人々がいかにも憤慨したかは想像に難くない。さてこのような幼稚園の傾向がどうしてできたかとい

う解釈に至っては、それはどんなにかキンダーガルトナーたちを怒らせたことだろうと思う。「ほとんどすべての側近の弟子たちが婦人である。しかもその大部分は母親でなく、ただ家庭生活のみが充すことのできる自然の欲望を充されないので空虚を感じている年令である。この年令では彼らは代償として、又活動力は刷け口を必要とするという法則に従って、愛情と情熱の対象を見出さなければならぬのである。そこでフレイベルの小さなシンボルの中にすべてのものが象徴されるという解釈の中にも、我々はバルザックの言う人性記録（人間性を明らかにする事実）を見つけることができるし、教養ある婦人たちの独身生活の精神的研究をする方が、はるかに価値があるのである。」

(四) 更にホールの指摘したところは、幼稚園における健康衛生の欠如である。その由って来るところは、「余りにも高尚な理論にのみ耽っているところに、衛生面を無視する原因がある。」そして彼は、幼稚園の理論をすっかり改めて、「子どもの発達に忠実になり、新しい心理学と手を結んで」ゆくことの必要を強調したのである。そして最後に、「フレイベル自身は、彼の仕事を未完成のまま残した。そして彼がなしたことは更に高い観点からの解釈を必要とするのである。」と結んでいる。

児童研究の立場から恩物を再検討し、幼稚園教育の実際を再構成することの必要を強調したもう一人の指導者は、ジョ

ン・デューイーであった。彼は早くよりルイスヴィルのブライアン女史又その弟子のバティ・ヒルの仕事の実際に注目し、激励を与えていた。ここでは恩物と形式的な幼稚園の枠をはなれて、人形が使われ、ままごとが行われ、自然物が利用されて、進歩主義教育の実際が静かに進行していたのである。デューイーはそこに彼の理論の展開の場を見出した。彼は言っている。「時は来た。幼稚園は子どもの自発的な遊びの研究から集められた事実にもつき、遊びの理論に照して、幼稚園の実際を再検討すべきである。子どもの年令差、性差、人種差、社会環境の差、もろもろの個人差に照して実際面が考慮されねばならない。……心理学的観点から幼稚園の理論と実際を研究することは重要である。何となれば、それによって教師は抽象的な哲学的命題を具体的な生きた人間にそくして解釈することができ、心理学によってすべての教育材料を個人の能力と目標に適合させることができるからである。心理学を幼稚園の実際に適用することは、それにもっと力を与え、人間的にすることを意味している。」^(註五)

こうして幼稚園の実際家の中の幼稚園批判者と、児童研究者とが結合して、強い力となっていった。これが「進歩派」と呼ばれる一群の人々であり、これに対してブロー女史を中心として伝統的フレーベル主義に固執する人々は「保守派」と呼ばれて、それぞれ自己の立場を主張したのである。進歩派にとっては、従来の伝統的な幼稚園の教育法に對抗して、そ

れにとって代るに足るだけの理論と実際の新しい道を見出すことがその課題であったし、保守派にとっては、彼らが長い間従ってきた立場と実際とを正当化するだけの哲学を見出すことがその課題であった。この両者の論争は、進歩派を代表するバティ・ヒルと保守派を代表するスザン・ブローとの間に最も顕著に闘わされ、幼稚園界全般の注目を浴びながら、一八九二年から一九一〇年まで、十年以上にわたって続いたのである。その間に出版された国際幼稚園連盟の一連の出版物はその事情を物語っている。しかしここでは余りにも微にいり細をうがった恩物論争を紹介することはやめよう。そんなくどくどしい恩物論争は、全く現代の我々をも睡気に誘うものであり、恩物が否定されてから半世紀も経った現在、またわざわざ恩物を棚の上からとり出してくるまでもなかるうから。

註一 Bryan, A. : The Letter Kilnh. National Education

Association, 1890, p. 573~581

註二 Wheelock, L. : Opening Address, National Education

Association, 1895, p. 512.

註三 Gage, L. : Introduction to the Slow Growth of Professionalism. Peabody Journal of Education, 1942~3,

Vol. 20, 151~156

註四 Hall, S. G. : Some Defects of the Kindergarten in

America. Forum, Vol. 28, 1900, 579~591

註五 Dewey, J. : The Kindergarten and Child Study. National Education Association, 1897, p. 585